



怪鼠一見帳
KAISOICHIGENCHO

成人向
111当番


美食家
成人向

KAISOICHIGENCHO

111当番

+ + + + +

怪鼠一見帳
美食家



これは俺が
雇われてる……

『美食家サロン』の
話なのだけぞ

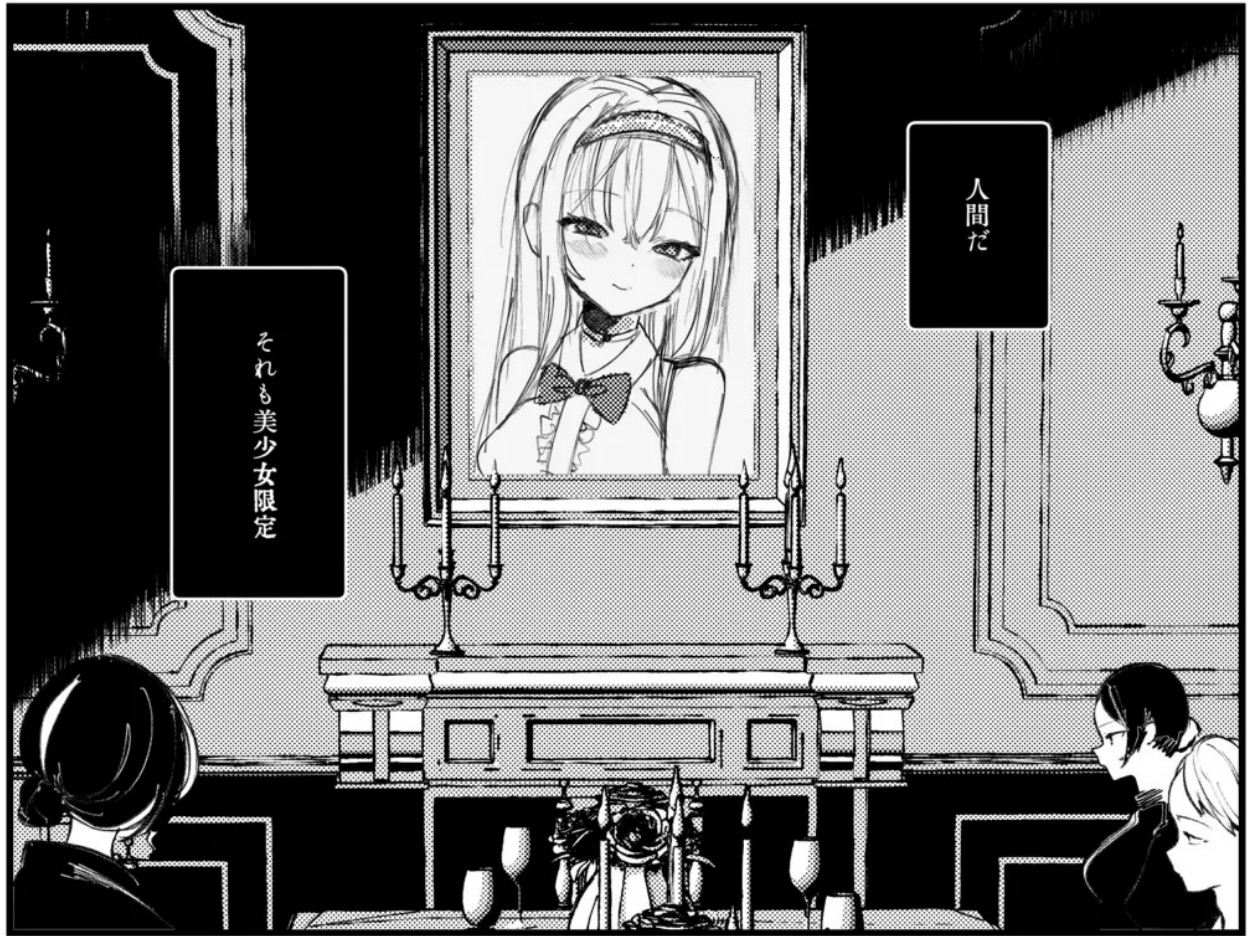
まあ
「美食家」というのは
皮肉でさ……

やつらはいつも
変なものばかり
好んで食べるんだ

山で遭難した人が
実際に山で食べつないで
たものさか

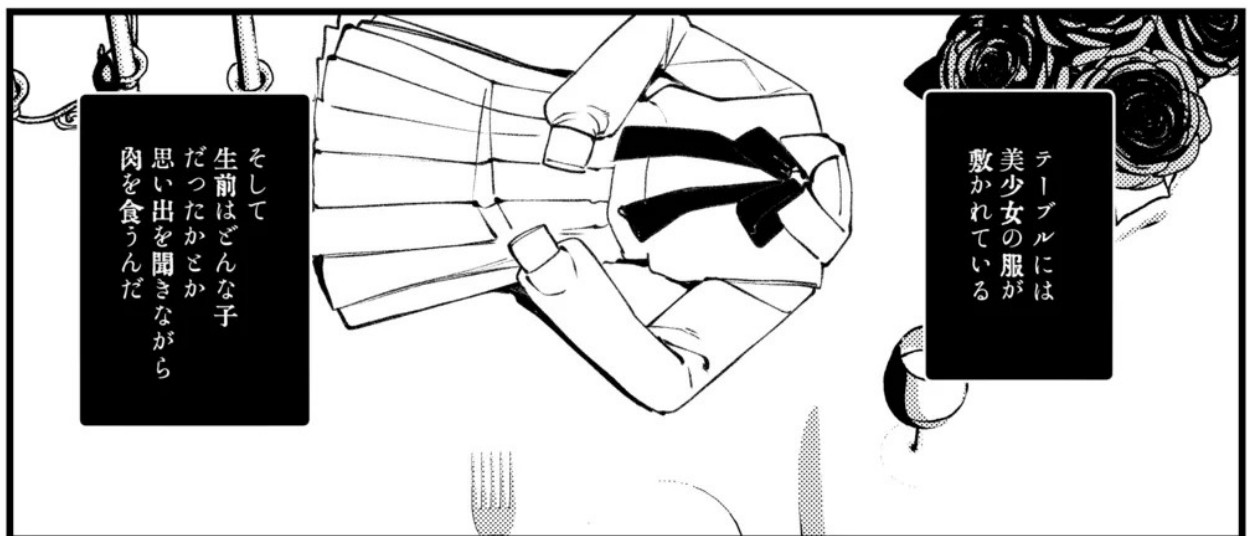
でも最近
は何に
お熱だと思っう？





それも美少女限定

人間だ



そして
生前はどんな子
だったかとか
思いつきを聞きながら
肉を食うんだ

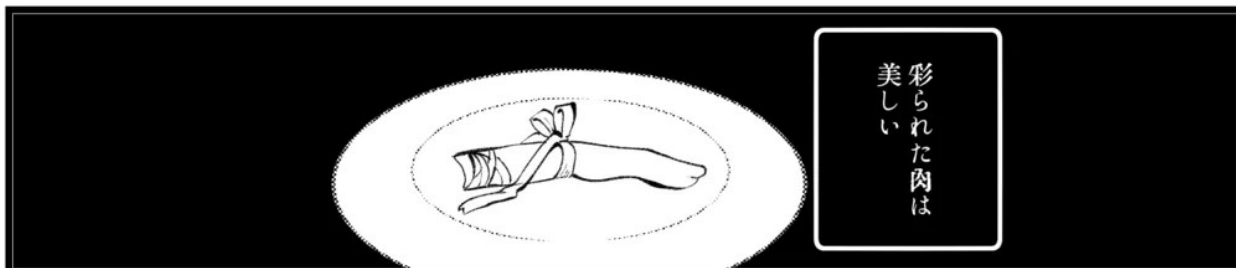
テーブルには
美少女の服が
敷かれている



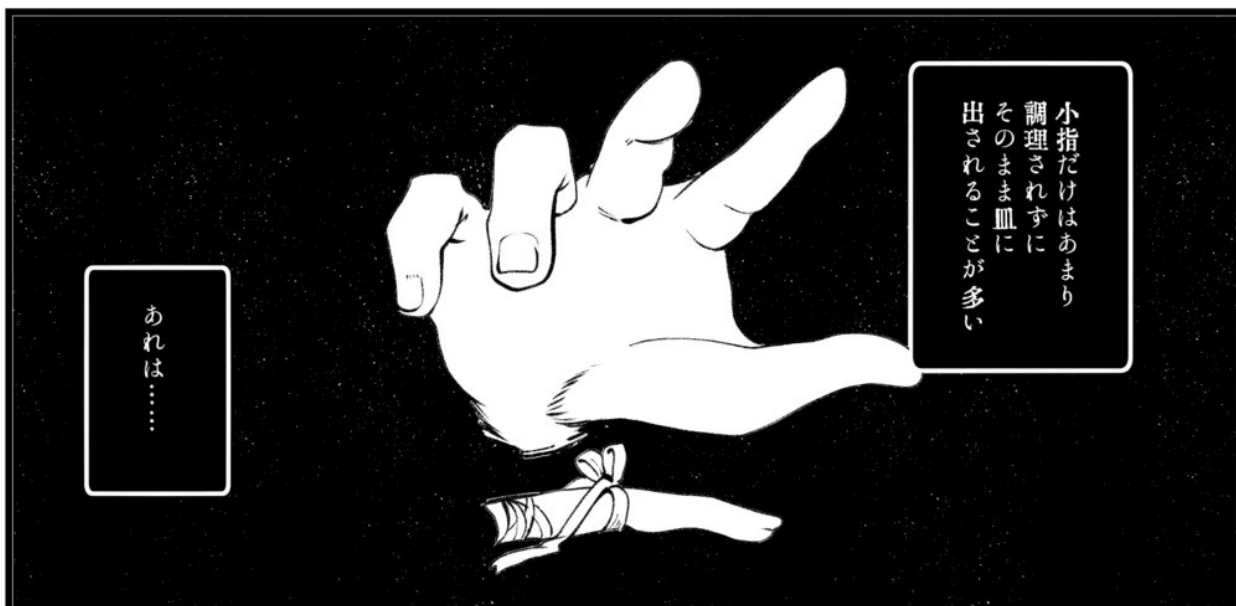
さあ……
みんないつも
黙々と
食べてるよ



味は？

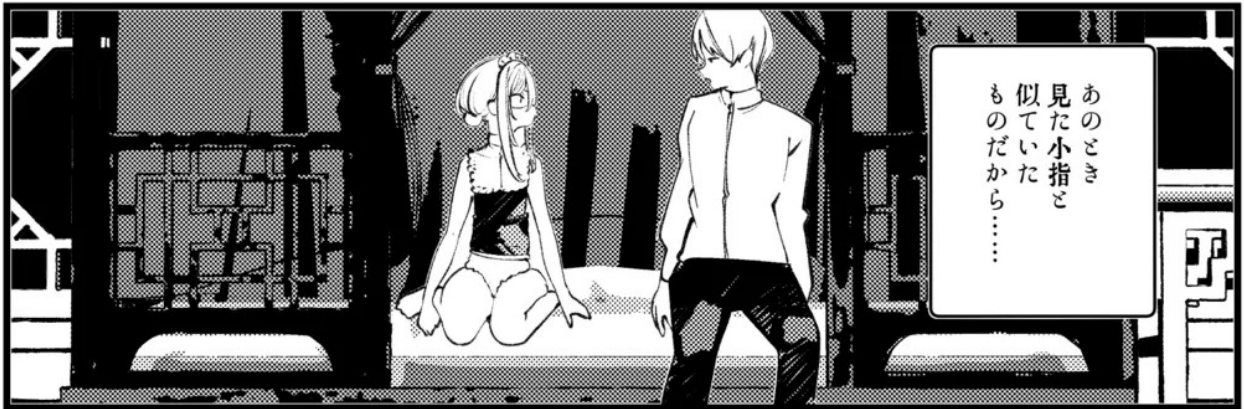


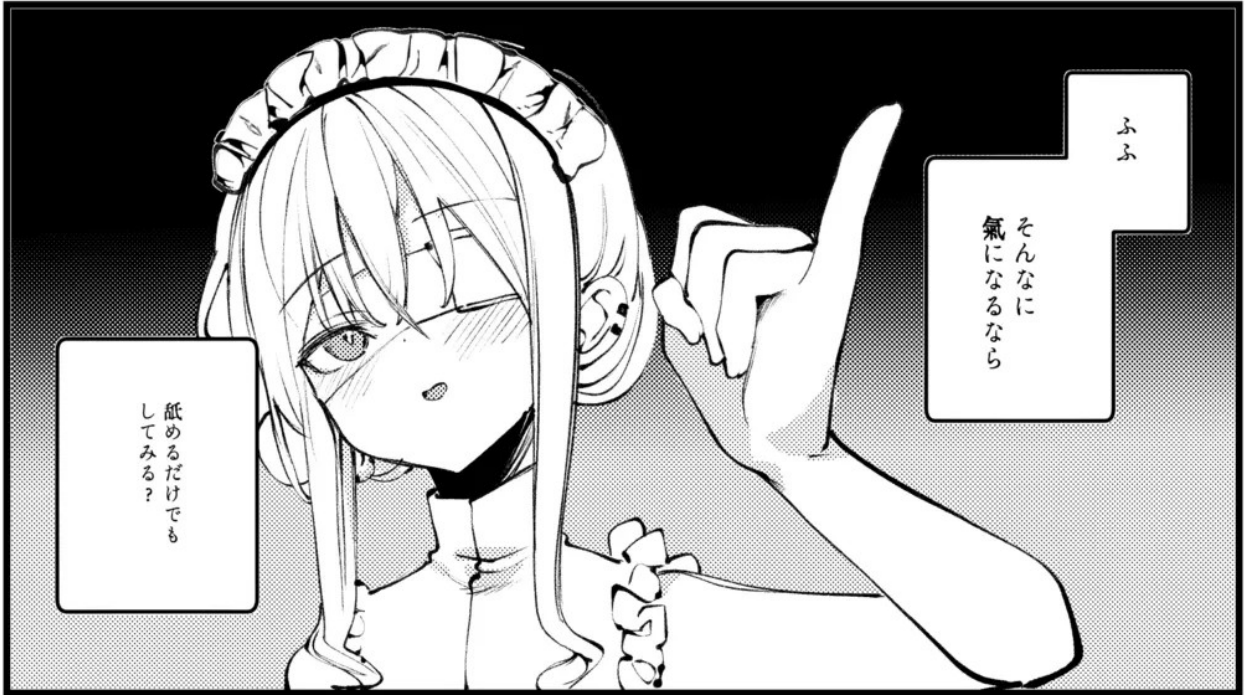
彩られた肉は
美しい



小指だけはあまり
調理されずに
そのまま皿に
出されることが多い

あれは……





紙めるだけでも
してみる？

ふふ
そんなに
気になるなら



変な子だな

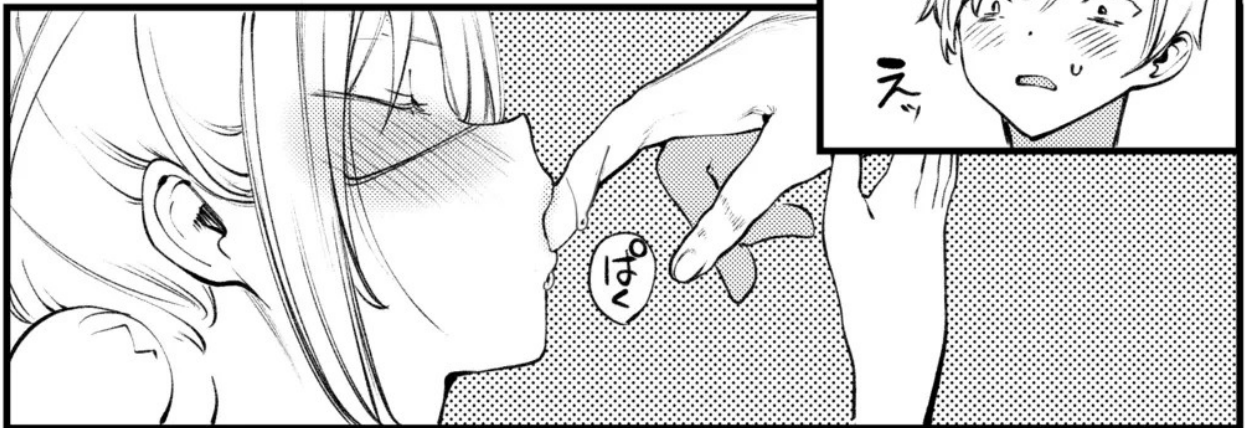
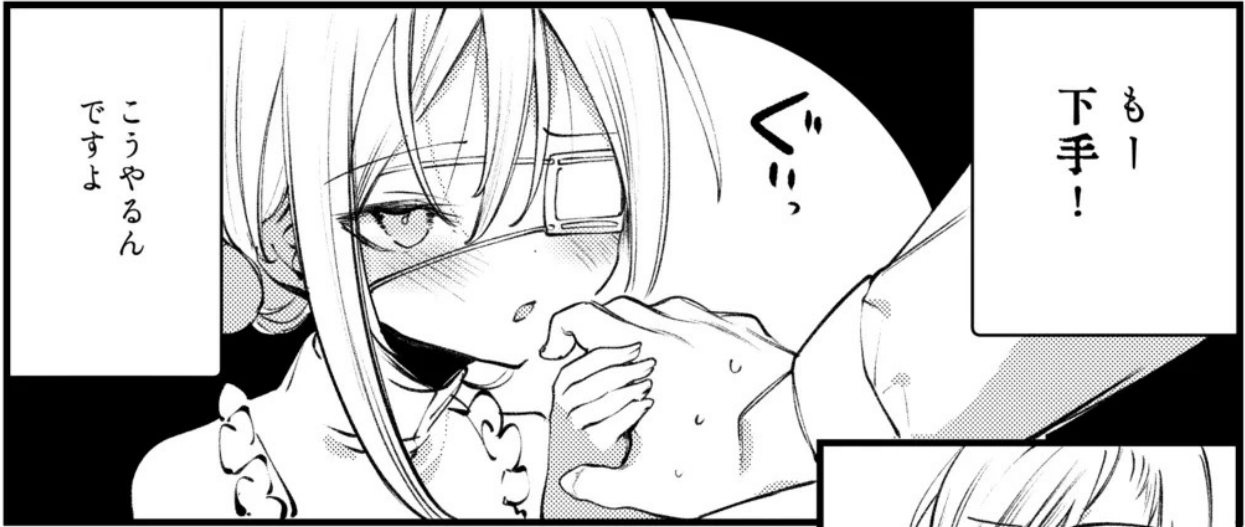
こんな話した
あとに……



えっ



じゃあ……
お言葉に甘えて……





ぬ
ぷっ...

うお

こ
これはっ...



おっ
おっ
おっ



へ
へ
へ

んふ
手え
おつきい



ぬ

お

お

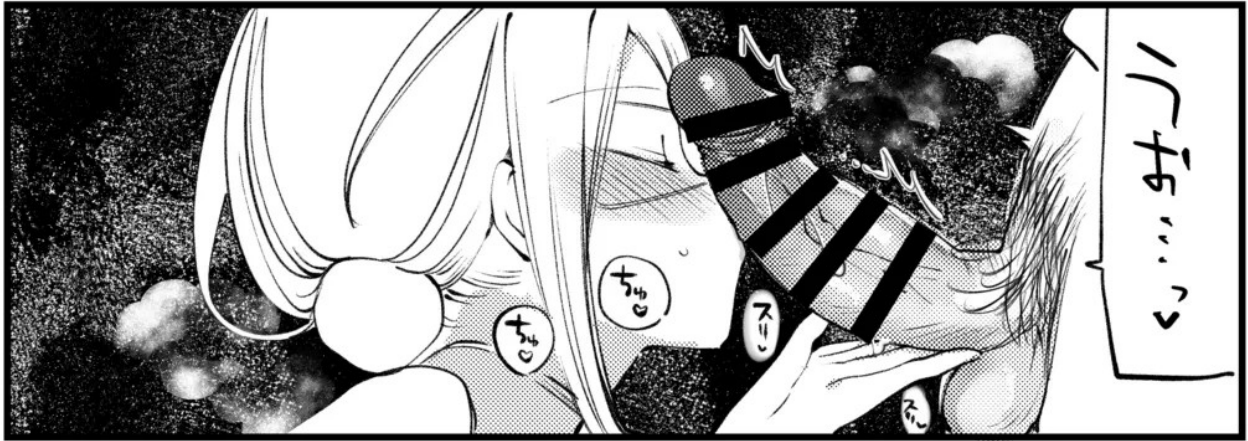


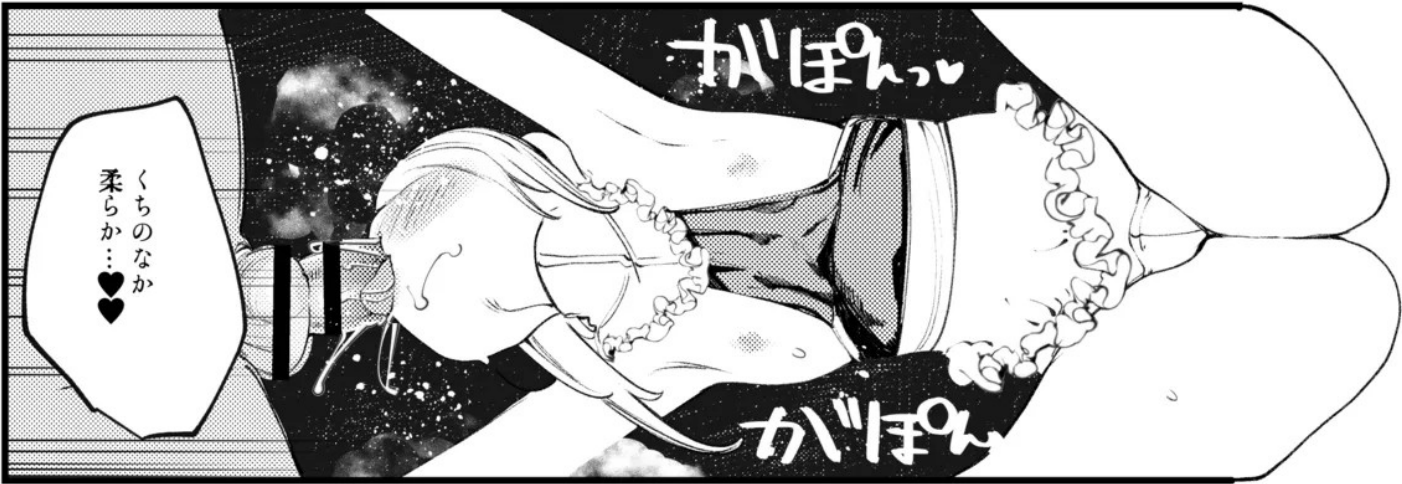


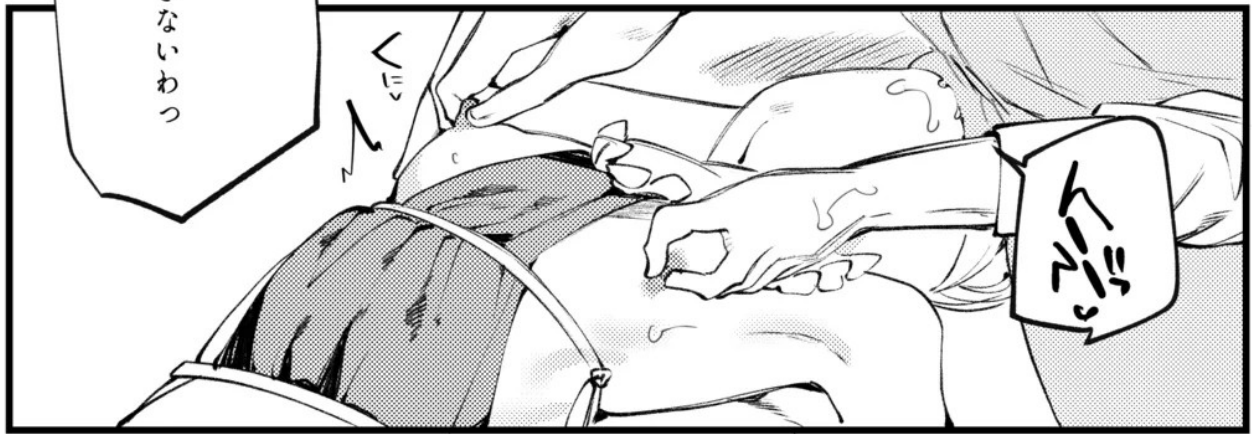
俺もっ♡♡♡
好きかも♡♡♡



あ
遊ばないでえ...♡

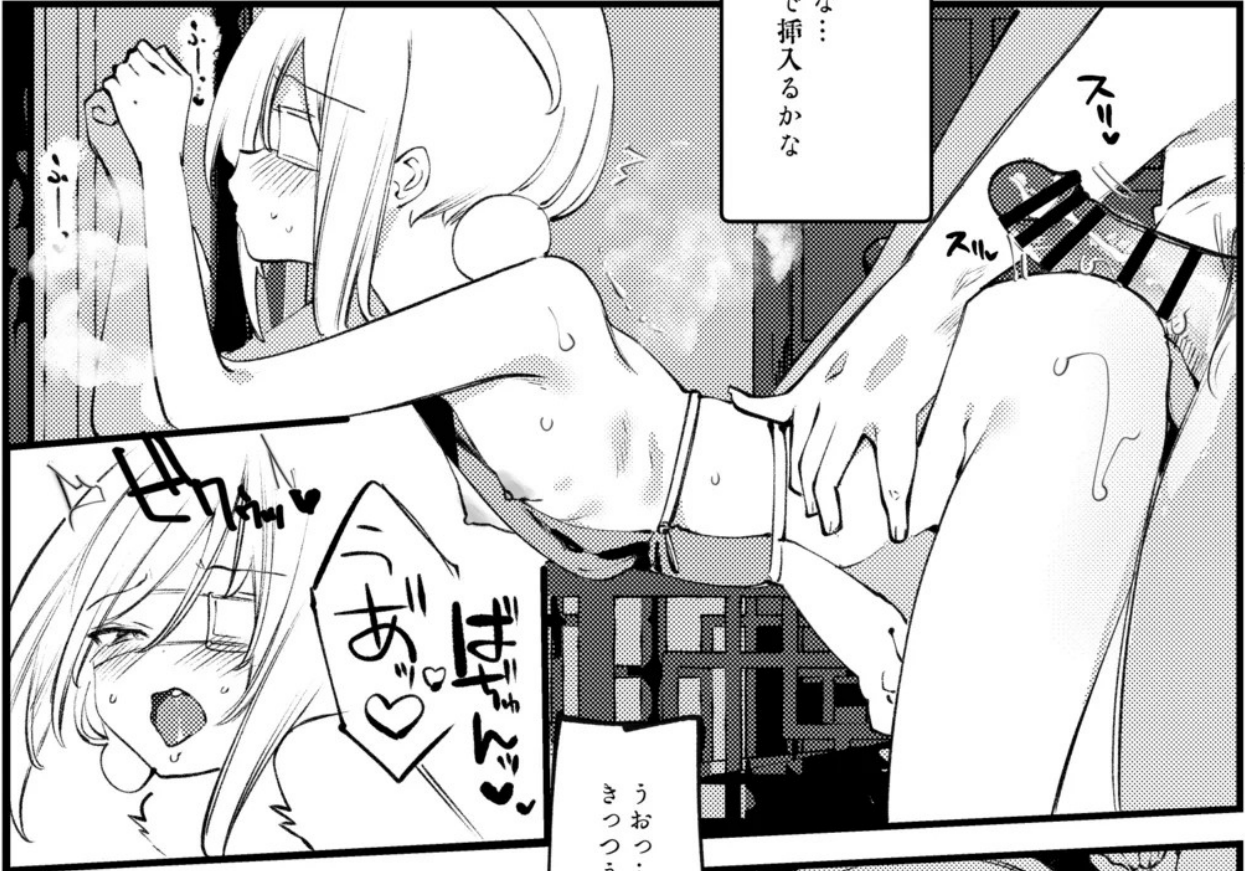








やっぱ
小さいな：
どこまで挿入るかな



うおっ：
きゅっくゅっくゅっ
♡



もうちよつと
力抜けて

うっ
中ぎうきうで

はりうきう
…ッ♡

尻肉も

やば…♡
もげそう…ッ

きゅららら♡





あつも♡
イキそう♡
いっしょに...っ!

な、あ♡



あ、♡

あ、♡

ぱん! ぱん!



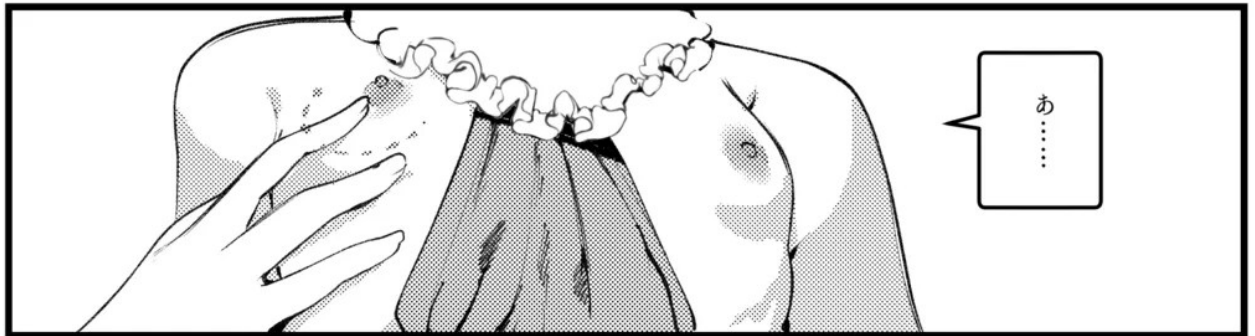
あ、♡

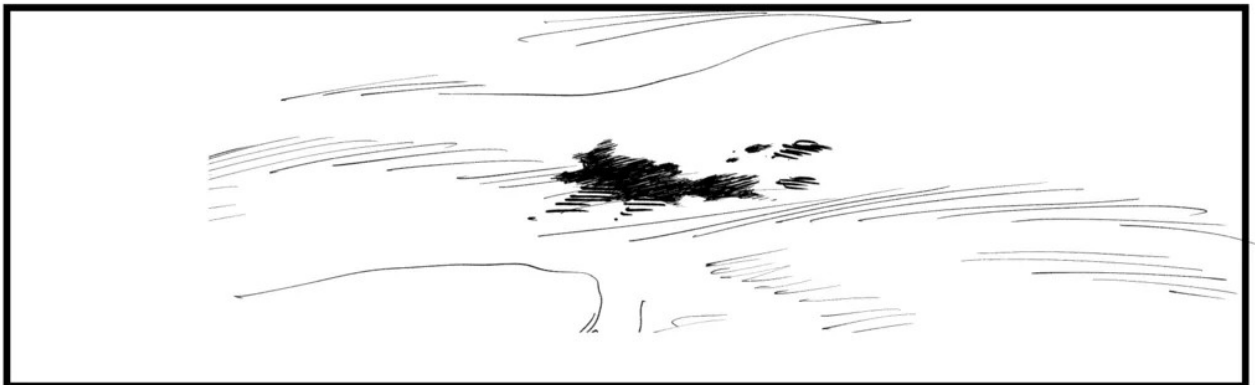
あ、♡

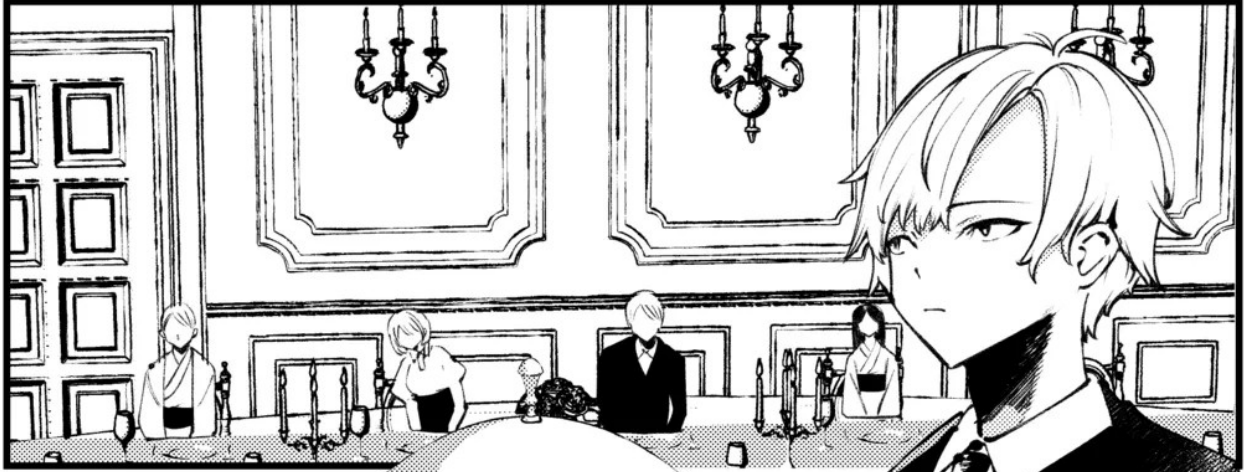
あ、♡

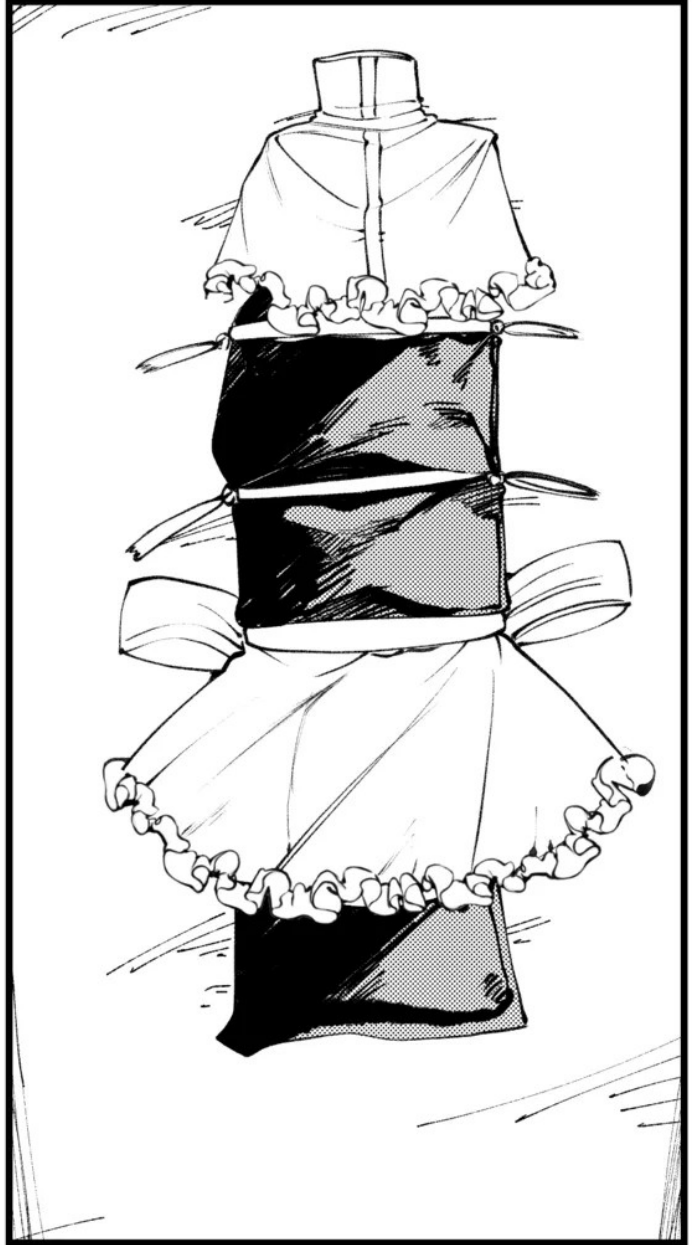
あ、♡

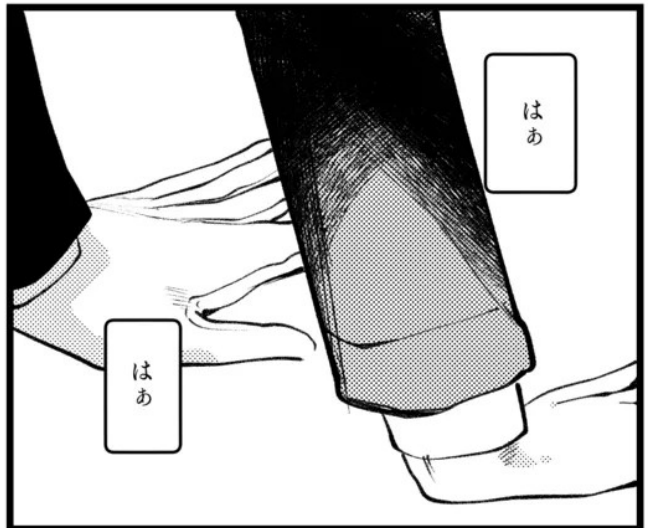
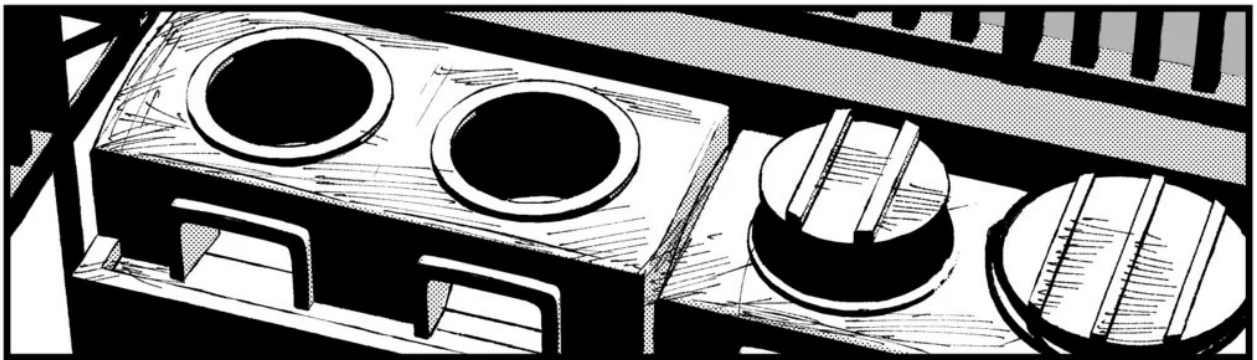
あ、♡















大丈夫
ですか？





ごめんね
依頼されて
あなたたちのこと
調査してたです



さっきの肉は
君じゃなければ
他の子の……？



まさか！
豚の肉と
すり替えて
置いたんです



「美食家」たちに
誘拐された
女の子の両親からね



本当は
何を食べてるか
なんて……
重要じゃないんじや
ないですか



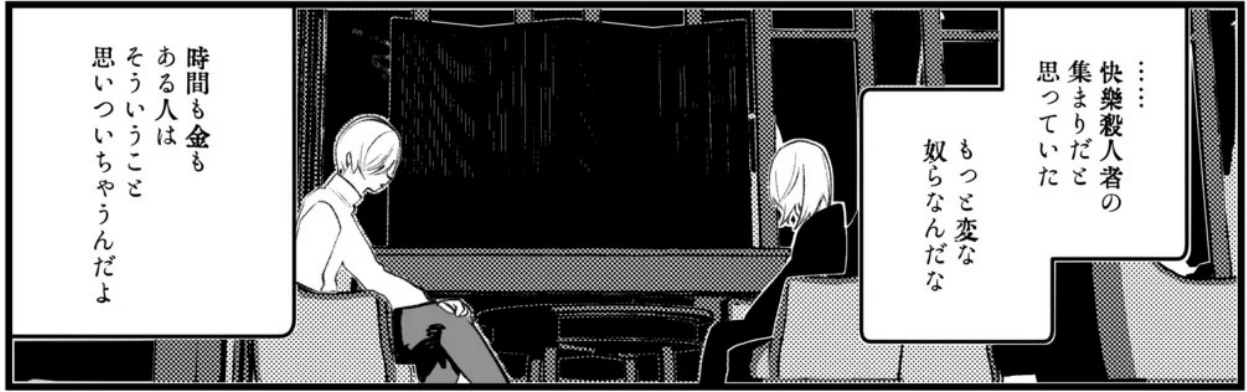
豚？
そんなことしたら
誰かは気づくだろう



「自分たちは
美少女を誘拐して
食べている」

そういうことを
しても
差し支えない
身分だとか

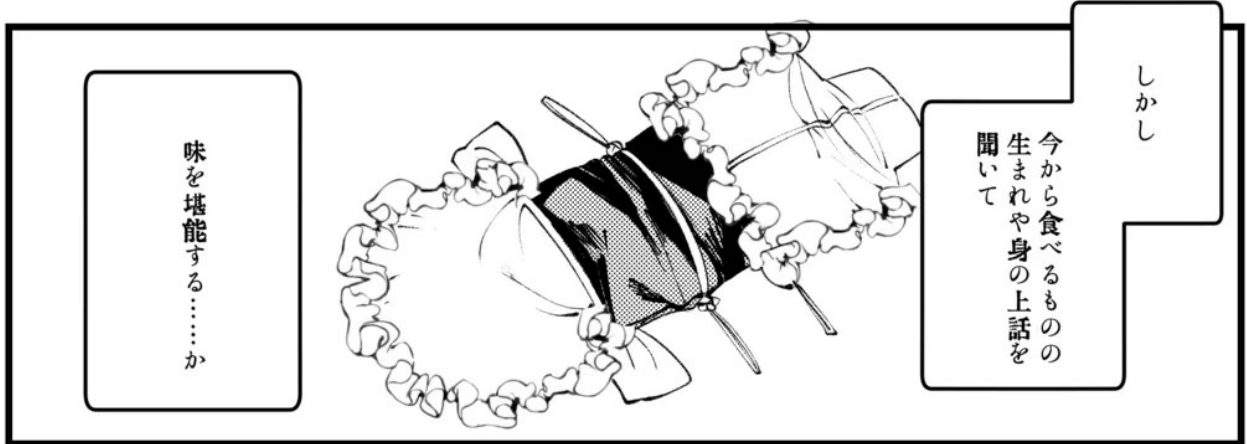
秘密の共有だとか
自分たちの
結束だとかを
確認し合うことが
目的……だつたり……



時間も金も
ある人は
そういうこと
思いついちやうんだよ

……
快樂殺人者の
集まりだと
思っていた

もつと変な
奴らなんだな



味を堪能する……か

今から食べるものの
生まれや身の上話を
聞いて

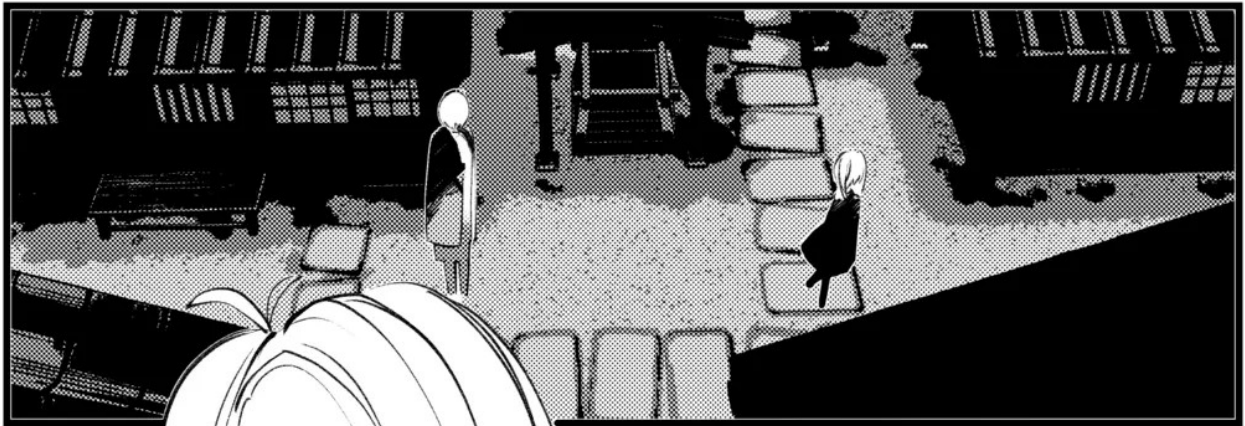
しかし



僕が
美味しいと
いいのだけれど



そのとき





あの時…

あの中で
人間の肉では
ないことに
気づいてる奴は
いただろう

なんせ
『美食家』の
集まりなのだから



どうでも
いいか

あの子の
肉であると
確信を得て
あの子を
食べられるのは

俺だけだ



あとがき

ここまで読んでくださり、本当にありがとうございました。
今回の本で「怪鼠一見帳」を初めて知ったという方は、ぜひ他の巻もお手に取ってみてください。基本的にどれも今回のような短編読み切りですので、ジャケ買いで大丈夫です。
この本を閉じたあとも、少しだけほかの「怪鼠一見帳」の世界に浸っていただけたなら幸いです。

今回は「カニバリズム」——というよりは「秘密の共有」や「美少女を食べる」というテーマに焦点を当てて物語を描きました。
本当は「怪鼠一見帳・流星」という、柳太郎と葉一の出会いを描いたエピソードを作りたかったのですが、それは本当に気合を入れて描きたく、最低でも一年ほどかかると春ごろに気づき……。そこで急遽、怪鼠一見帳らしい“スタンダードなホラー短編”を仕立てることにしました。

本作は amazarashi の『季節は次々死んでいく』のMVにとっても影響を受けています。

冒頭で流れる谷川俊太郎の詩の

「イノチはイノチを食べて生きています。イノチを食べた私はいつかイノチに食べられる。私が美味しいといいのだけれど」

この一節がとても衝撃的でした。

私はこれまで「食べる」ことは考えても、「食べられる」ことは考えたことがなかったのです。「食べる側がこんなことを考えるのか」と驚くと同時に、「これは他者を思いやる心なのか、それとも世界を俯瞰しているから出てくる考えなのか」と、自分がとても小さく感じられました。

葉一ちゃんは魔法使いで、人間の上位存在であり、なんなら人間を食べてしまうような生き物です。でも、彼女ならきっと“本能”よりも“生き物全体的な視点”を優先するだろうと思ったので、この言葉を彼女に語らせてみました。

こうして書いてると、『怪鼠一見帳・鬼灯』で描いた「命をつなぐために親を食べた柘榴」の話もしたくなってしまうのですが……長くなりそうなのでまた別の機会に。それこそ、この本を閉じたあとも少しだけ物語の世界を感じていただけたなら嬉しいです。『鬼灯』は愛蔵版として出したいと思っているので、そのときに詳しくお話できればと思います。

次回作は『怪鼠一見帳・鬼灯』の愛蔵版か、それとも夏に『怪鼠一見帳・流星』か……。その合間に、もしかしたらただただエッチな本を作るかもしれません。わかりません！出したいときに、出したいものを出していきますので、どうぞ気長にお付き合いください。

では、またお会いできますように～！

1号

2025/07/26

怪鼠一見帳
美食家

著者名 1号(111当番)
発行日 2025年8月17日
印刷 STARBOOKS
表紙装丁 ももたろす(ONIGASHIMA design)

HP : <https://potofu.me/no100>
Mail : yamada.no100@gmail.com
X (Twitter) : @no100
